

## 論文の内容の要旨

論文提出者氏名	酒井洋徳
論文審査担当者	主査 平塚左千枝 教授 副査 本郷一博 教授 ・ 伊藤研一 教授
論文題目	A retrospective analysis of the prevalence of dental diseases in patients with digestive system cancers (消化器癌患者の歯科疾患有病率に関する回顧的分析)
(論文の内容の要旨)	<p>【研究背景】消化器疾患を有する患者は、しばしば一般の人よりも歯科治療が必要であると言われている。しかし、その仮定はいまだに証明されておらず、消化器癌の有病率と歯科疾患の関係は明確にされていない。</p> <p>【目的】本研究の目的は消化器癌の治療を受けた患者の歯科疾患有病率を調査すること。</p> <p>【研究対象・方法】消化器癌患者の歯のう蝕罹患状況を調査した。対象は、2012年1月から2013年12月までの2年間に信州大学病院で消化器癌に対する周術期口腔機能管理を施行した332人(男性115、女性217人。平均年齢70.0±5.02歳)とした。調査項目は、DMFT指数(D:未処置う蝕歯数、M:喪失歯数、F:う蝕処置歯数)および義歯の使用状況である。次に、2017年の1年間長野市市民病院で消化器癌に対する周術期口腔機能管理を施行した216人(男性125、女性91人。平均年齢65.2±9.8歳)を対象に歯周病の罹患状況を調査した。WHOのプロープを用い、WHOの地域歯周疾患指数(CPI)に従い評価した。</p> <p>【結果】調査の結果は歯科疾患実態調査と比較した。DMFT指数と義歯装着に関しては2011年の調査と、歯周疾患に関しては2016年の調査と比較した。統計学的手法はMann-Whitney U test, chi-squared test, Dunnett's multiple comparison testを用い、P&lt;0.05を有意差ありと判定した。</p> <p>DMFT指数を歯科疾患実態調査と比較すると、消化器癌患者群では未処置歯と処置歯の歯数は有意に低く、喪失歯の歯数は少し高い傾向がみられた。癌の部位別で有意差は認めなかった。残存歯が20本以下の割合は60歳代で、義歯の装着率は70歳代で歯科疾患実態調査より有意に低い結果であった。癌の部位別に有意差は認めなかった。歯周病に関しては、消化器癌患者群では歯周病有病率が有意に高かった。CPIコードの3.4を歯周病とし、そのうちCPIコード4(重度な歯周病)は癌患者群で歯科疾患実態調査よりも有意に高い結果であった。癌の臓器別に有意差は認めなかった。</p> <p>【結論】以前より食道癌や胃癌では、歯周病のような慢性細菌感染による歯の喪失は一般的に知られていた。今回の結果より、消化器癌と多数の喪失歯ならびに低い義歯装着率は密接な関係が示された。また、重度な歯周病の有病率も癌患者群で高いことがわかった。これらの結果は歯周病と多数の喪失歯の関連性は、消化器癌発症に対し潜在的役割を果たしていることが示唆された。</p>